



.....
 監督・脚本＝クァク・ジェヨン
 ／出演＝ソン・イェジン／チ
 ヨ・インソン／イ・サンイン／
 チョ・スンウ／イ・ギウ（クロ
 ックスワークス、メディア・ス
 ーツ配給／2003年韓国映画／
 129分）

恋に悩む女子大生のジヘ。そのジヘはふとしたことで母の昔のラブレターと日記を読むことに……。そこには、母の35年前の美しくも悲しい恋の物語が……。そして今、片想いをしているジヘの恋は……。雨とカサ、そして頻りに授受されるペンダントがこの映画を大きく演出し、ラストの大感動へと導いていく。タイトル通り最高のラブストーリー。絶対のおすすめ作だ。

🎬 2003年、娘のラブストーリー

女子大生の主人公ジヘ（ソン・イェジン）は、カッコいい演劇部の先輩のサンミン（チョ・インソン）に恋しているが、なかなか言い出せない。こんなサンミンに積極的にアプローチするのは、ジヘの親友の女の子スギョン（イ・サンイン）。人のいいジヘは、スギョンに代わってサンミンへの「ラブレター」の代筆（？）がお役目。せっせとその役目を果たし、サンミンとスギョンの恋が成就するよう、「恋のキューピット」役に徹するジヘ。ジヘが女同士の友情の下に自分のために協力してくれていると信じているスギョンは、ジヘを使い放題。必要な時だけ利用し、邪魔になったら「早く帰れ」と合図……。

珍しくサンミンからプレゼントを2つもらい、ジヘとスギョンの2人で好きな方を選べと言われて、ジヘが1つを選んだものの、後からスギョンは一方的にその交換を要求する始末。何ともやるせないことだ。この「残り物」のプレゼントの中のカードには、サンミンの愛の言葉が……。これはもちろんスギョンに宛て

たもの、とジへは理解していた。そこで、ジへはもうサンミンとは会わないと決断。それを実行に移したが……？

1968年、母のラブストーリー

時は変わって、2003年の今から35年前の1968年。国会議員の父を持つ美しい娘ジュヒ（ソン・イエジンの一人二役）には、父親が許婚と決めたテス（イ・ギウ）という男性がいた。テスは異常（？）なほどの長身で、性格もちょっと変わったヤツ。このテスの無二の親友が同級生のジュナ（チョ・スンウ）だ。ジュナは、テスに代わって、ジュヒへのラブレターを代筆する役目を引き受けていた。しかしジュヒが本当に想う男性は……？

いつの頃からか、ジュヒからテスへの返事は来なくなり、焦ったテスは、ジュヒへの想いを告白。しかしジュヒは……？ このテスはちょっと変わったヤツだが本当にいい男。ジュヒが想う男性が自分ではなく、親友のジュナだということが分かると、たちまちその友人の恋の成就のために協力することに。

しかし、コトはそううまく運ばない。冬休みの間のジュヒとジュナの2人の生きがいとなった、テスの名前（差出人）によるジュナの手紙とこの手紙へのジュヒの返事というラブレターの交換が、ふとした行き違いでテスの親達にバレてしまったのだ。そして、ベトナム戦争への派兵という時代状況の中、ジュナは1人戦地へと旅立った。列車に乗るジュナを見送り、「絶対に生きて帰ってきて！」と繰り返し叫ぶジュヒ。そしてこの時、再びジュナの首にかけられるペンダント。2人の恋の行方は一体どうなるのだろうか……？

物語はさらにベトナムからのジュナの帰還にも及ぶが、ホントに切なく、悲しい2人のラブストーリーだ。

1968年のジュナとジュヒの思い出

ジュナがジュヒを初めて見たのは、夏休みを田舎で過ごしていた時。泥だらけになって友人たちと遊んでいたジュナの前に現れたジュヒは、「お化け屋敷に連れて行って」とジュナに声をかけた。これは、国会議員の娘という立場のため自由な行動がとれず、行きたかったお化け屋敷に誰も連れて行ってくれる人がいな

かったためだが、当然ジュナはそれだけで有頂天に……。喜び勇んで出かけて行ったものの、帰りは散々な目に……。すなわち、はじめて漕いだ舟は流されてしまい、さらに夕立ちに打たれ、走って帰る途中転んだジュヒは足をくじいてしまった。しかしこんなハプニングは決してマイナスではない。むしろそれは、2人にとっては天が与えた千載一遇のチャンスだった。夕立ちを避けた小屋での2人の語らい。足をくじいたジュヒを背負って歩く中で感じるお互いの暖かさ、そして雨が止んだ後、そっと手に取ったホタル。このようなすばらしい2人だけの「デート」は、それだけ2人の心を結びつけ、生涯忘れられない思い出の1日となったのだ。もっとも、心配して迎えに来たジュヒのお屋敷の人たちにジュヒを引き渡す時の状況は最悪。しかしそれでも、その別れ際、ジュヒが「お礼に何かあげたいけど、これしかないから」と言って、自分の首からはずしてジュナの首にかけてくれたペンダントは最高の贈り物。そしてこのペンダントは、母娘を通して受け継がれていく運命的なものとなった。

母と娘のラブストーリーをつなぐ手紙の束

ジヘが、その母ジュヒのラブストーリーを知ったのは、母親の日記帳と手紙が詰めこまれた母の木箱から。偶然これを発見し、おそろおそろこれを読み始めたジヘは、それによって若き日の母のラブストーリーを知ること。その1通の手紙には、「太陽が海をほのかに照らしたら僕は君を想う」「月明かりが泉に浮かんだら僕は君を想う」と何ともロマンティックな恋の殺し文句が……。しかしこの文句は、なぜか、あの「贈り物」のプレゼントの中のカードに、サンミンがスギョンに宛てて(?)書いていた文章と同じ……。果たしてこれは何を意味するのだろうか……?

時代を超えて結びつけるのは雨

ジヘの母ジュヒとジュナとの間で「お化け屋敷」の見学から生まれた恋。それを演出したのは夕立ちだった。そして夕立ちが上がった後、川辺で美しく飛び回るホタル。2人の恋はこんなロマンティックな演出の中で始まった。そして、娘ジヘの恋は……。これも雨。そして、それを演出したのは1本のカサだった。

本当はスギョンではなく、ジヘに想いを寄せているサンミンは、雨の中、木陰で雨宿りをしているジヘを見つけると、自分のカサを放り出して、1人上着をけながらジヘのもとへ駆けつけた。そして「相合ガサ」ならぬ「相合上着」で、2人身体を寄せ合って、図書館まで走っていった。ジヘにとって、このちょっとした出来事は至高の時間だったが、その後偶然に、サンミンはその時カサを放り出して飛び出していった人だという話を聞かされた時のジヘの胸の高鳴りと顔の輝きはその比ではなかった。何ともすばらしい演出をする雨とカサ、そして「相合上着」だ。

ジヘの父親は？

この映画は、母親ジュヒと娘ジヘのラブストーリーが同時並行的に描かれ、その1つ1つのストーリー展開自体が魅力的だが、意図的に(?)ボヤカしている部分がある。それはジヘの父親が誰なのかということだ。ジュヒとジュナとの恋。テスの求婚の拒否とテスの自殺未遂(?)。ジュナのベトナム戦争への参加と帰還。こんなストーリーの進行につれて少しずつ真相が明らかになっていくが、その過程がすごく重要。それを前提としたうえでラストの大きな感動へと向かうわけだ。

涙と感動を演出するペンダント

この映画では、「お化け屋敷」の見学終了後に、はじめてジュヒの首からジュナの首にペンダントが移されていく。そして、そのペンダントは、ジュヒとジュナの恋の物語の展開につれて、返されたり、また渡されたりと変遷していき、そのたびに1つの新しいストーリーが生まれていく。

なお、この映画での男女の恋や愛はすごく「禁欲的」。ハリウッド映画のように、知り合ったその日に「ベッドイン」というようなことはなく、キスシーンすらごくわずか。ジュヒとジュナとの恋における「肉体的密着度」は、雨の中で1つのカサの下に身を寄せ合ったり、相手の首にペンダントをかける中で触れ合う程度。しかし、それでも2人の中の恋の感動は十分に伝わってくるからえらいものだ。何もすぐにベッドインしなくても、恋愛のときめきや感動は十分に存在す

るということが、こういう映画を観ると実によく納得できる。

それをうまく演出している監督は、あの1年前の大ヒット作『猟奇的な彼女』のクァク・ジェヨン監督だ。『猟奇的な彼女』は、ド派手なところから入り、ラストになるにしたがってしんみりとしてきた映画だったが、この『ラブストーリー』は、最初から最後まで美しいラブストーリーのオンパレード。そして最後に、「あなるほど……」と納得できる大きな感動。

何のセリフもなく何の説明もない中、映像だけで最後の最後にサンミンからジヘへとペンダントが受け渡されるシーンは実に感動的。私はこんな美しい恋愛映画が大好き。超おすすめ作だ。

2004(平成16)年2月10日記

ミニコラム

初恋と学生運動とラブレター

「淡い初恋」は誰もが小学校時代に経験するもの……？ しかし、本格的な初恋(?)は、ウブな私にとっては大学へ入学した直後から。私が大学へ入学した1967年は、70年安保をひかえた政治の季節の真ただ中。次々と広がる大学封鎖から1969年の東大安田講堂攻防戦までは、私たち団塊の世代の人間それぞれが何らかの形で学生運動に関与し、その影響を受けている。したがって、その大学紛争の時代を真面目に(?)生きてきた私にとっては、初恋もその学生運動に伴うものだが、その内容はヒミツ。

今はメールの時代。したがって、ラブメール花盛りだが、私たちの時代は

当然ラブレター。この両者が決定的に違うのは文章力。つまり、思いつくことを次々と文字に変換させるだけの今のラブメールと根本的に違うのは、口説き文句を連ねたラブレター作成への思い入れ。その思いをこめたラブレター作成訓練の成果は、弁護士になった今も私の中に脈々と生きている。戦後間もない時代の日本で、青春文学の頂点となった石坂洋次郎の『青い山脈』に登場する「変しい変しい新子サマ」と書き間違えるようなラブレターでは、熱い恋を語る資格なし!

初恋と学生運動とラブレターは、三位一体(?)のものとして私の中に生きている! ジャンジャン!